

闇夜の決闘の段

『解放されたエルサレム』第十二歌全体と第十三歌冒頭

Il Canto 12 e l'inizio del Canto 13 della *Gerusalemme liberata*

水野 留規

MIZUNO Ruki

Stiamo ad uno dei canti più famosi della *Gerusalemme liberata*, il dodicesimo canto. Famoso soprattutto perché la scena centrale del canto è stata musicata da Claudio Monteverdi nel 1600. Noi, della sezione della lingua italiana dell'Ateneo, in occasione della serata dedicate al Tasso nel 2014, abbiamo fatto ascoltare da vivo al pubblico "Il combattimento di Tancredi e Clorinda" di questo grande compositore. Ora con questa traduzione, vorrei far conoscere ai lettori di questo *bulletin* tutte le scene del canto, in cui domina, dal principio alla fine, la figura di Clorinda. Questa guerriera audacissima esce nottetempo dalla città per bruciare la macchina da guerra dei cristiani e, sconfitta nel duello con Tancredi, muore non più come una mussulmana, ma come una cristiana. All'inizio del canto tredicesimo, invece, il mago Ismeno evoca le forze infernali e cerca di impedire ai cristiani di procurarsi il legname necessario per la costruzione della macchina da guerra

第十二歌 (1)

一 夜の闇にあたりが包まれても尚、戦士たちはおのれの疲れ果てた身を、微睡ちゆうびによつて癒さうとはしなかった。こちら側のフランク人たちは夜を徹して破壁軍を整備しつつ、警備を怠らないようにしていたが、あちら側にいる異教徒たちは乱れ、ほころびた防戦体制を立て直し、壊された城壁を補修していた。両軍において等しく展開されていたのは、自軍の負傷者に対する治療であった⁽¹⁾。二 負傷兵がようやく手当てされ、夜の間になされるべき作業が幾分なりとも完結したころ、黒さと静けさを増した影が戦士たちを眠りへと誘い、残された仕事の進展を遅らせる。だが、勇猛な女戦士クロリッダは満たされない武勲への切なる望みを成就せんとして、自軍の兵士たちを作業へと駆り立てる。アルガンテが傍らにいるものの、かのじよの言葉は自らに向けられる。三 「今日トルコトルコの王と勇ましきアルガンテは、類のないほど素晴らしい戦果をあげた。かれらは単独で数多の敵兵の群れに突入し、キリスト教軍の破壁軍に打撃を与えた⁽²⁾。私は塔の上にわが身の安全を

確保し、飛び具で遠方にいる敵を射抜いた（この手柄よって大きな称賛を受けたことを、私は誇りに思う）。私の弓の腕前は、自慢じゃないが、相当なもの。だが、女戦士にできることはこれに尽きるのか？

四 山や森で獣に向かって槍や矢を放っているほうが私にはよいのではないか、男たちの戦いの場に、騎士たちと交じって乙女が姿を見せるよりも！女らしい服装を再び着て、家に籠ろうか、それが私に相応しいのであれば。」このように独白し、熟慮し、ついに重大な決心をするに至り、アルガンテに向かって言う。五 「貴殿よ、穏やかならぬわが心は、かなり前から突飛で、大胆な或ることを思いめぐらせているのです。神が自らのご意思を吹きこませ給うたのか、それとも人〔である私〕が自らの願いを神の意思と思い込んでいるのか、定かではありません。敵の陣営の外に火が灯っているのを見てください。私は剣と松明をもってあそこへ行き、「塔」「破壁車」を燃やします。必ずその目的を果たし、後のことは神に委ねます。六 しかし私の帰還が逆運によって叶わなくなった場合には、父親のごとく私に愛情を注いでくれた男と、愛おしい私の侍女たちのことを貴殿に託したいのです。気落ちした女たちと年老いて疲れた男とをエジプトに戻すよう、貴殿に取り計らってもらいたいのです。神に誓って実行してください、貴殿よ、女である者と高齢に達した者は情けを受けるべきなのですから。」七 アルガンテは呆氣にとられたが、功名心におのれの胸が激しく打たれるのを感じ、こう答えた。「あなたは自分だけあそこへ行き、わたしには取り柄のない連中とここに残り、勲にも与らせないと言うのか。わしが安全な場所に留まり、炎と煙とが立ち上がるのを見て喜ぶと思っているのか。そんなことができる訳がない。あなたとは戦で運

命を共にしてきた仲であるならば、栄誉と死においても同じであることをわしは望む。八 わしも死を恐れず、命が栄誉の引き換えであると信じて疑わない心を持っている。」かのじよは言った、「その証明を貴殿はかの勇氣ある突撃によって見事に示されました。しかし私は女であるがゆえに、私の死は敵の脅威に晒されたエルサレムの町にとつて何ら損失にならないのです。それに対して、かりに貴殿が倒れるならば（天よ、そうした事態を生じさせ給うな）、誰がこれから町の城壁を護っていくのでしょうか？」九 騎士は答えた、「あなたは空虚な理由を並べて、わしの固い決断を変えようとするが、それは無駄だ。わしはあなたの後を進もう、もしあなたがわしを引き連れるなら。しかし、あなたがわしの同行を拒むなら、わしはあなたの前を進もう。」二人は互いに作戦を実行することで合意して、王のところへと向かい、王は武將や賢者たちの輪の中にかれらを迎え入れた。クロリンダが話の口火を切った、「おお、王よ、閣下に私たちが申し上げることに耳を傾け、どうか賛同し給え。十 ここにいるアルガンテはかの巨大な車両に放火すると豪語しています（かれは決して大言壮語を吐いてい

るのではないでしょう）。私はかれと行動を共にしますが、目下は敵軍が重なる疲労により眠り込むのを待っているのです。」王は両手を高く掲げ——その皺だらけの両頬をつたって感激極まって溢れ出た涙が流れ落ちた——言った、「アラー神に栄光あれ、あなたの信奉者たちに目を向け給え、わが王国を擁護し給え。十一 このような豪傑たちによって守られているならば、わが王国が直ちに滅亡への道を歩むことにはならないだろう。だが、頼もしいご兩人よ、余はそなたらの功業の見返りとして、称賛と褒美のいずれを授ければよいのか。名声

が不滅の言葉によりそなたらの栄光を称え、その言葉を唱和する声が世に響き渡ることを余は願う。褒美は企ての成果それ自体であるが、わが王国の少なからぬ部分もささやかな褒美としてそなたらに授けよう。」**十一** 白髪の王はこう述べると、二人を交互に優しく何度も抱きしめた。その場に同席していたスルタン^{ソリマーノ}は胸中の尊き對抗心を隠すことなく、言った。「わしだつて剣を無駄に腰に付けているのではないぞ。あんた方と共に、さもなければあんた方の少しだけ後を行かせてもらおうぜ。」クロリンダが応える、「嗚呼！この作戦に皆で参加するとおっしゃるのか。あなたまでが来られるならば、誰が残るとおっしゃるのか？」**十三** このようにクロリンダが言い、アルガンテもソリマーノの申し出を高飛車に拒否する構えであったが、王が割つて入り、ソリマーノに向かって穏やかな表情で言った。「高潔な戦士よ、そなたはいかなる危険を察知してもけつして慌てない、そういうそなた本来の姿を余にいつも見せてくれ、戦いにおいても疲れを見せたことがなかった。**十四** また、そなたが戦場でそなたに相応しい立派な功績を上げていることも知っている。だが、余には得策ではないと思われるのだ、武勇で鳴らしたそなたらが三人とも出陣して、町の中に一人も残らないというのは。こちらにいる二人が行くことさえ（かれらが傷つくことは避けなければならないが故に）余は許可したくないのだ、この企てがさほど重要でないならば、あるいは他の人員によって実行されるものであるならば。**十五** だが、大きな「塔」は周り一帯に見張りの兵がきわめて大勢いるので、わが軍の兵士を少数送ったところで破壊できないし、大勢の兵士を出陣させることも賢明ではない。こちらの二人はこの重大な作戦の実行役を自ら志願し、これまで幾度

も危険を克服してきたので、よき結果を期待して、余は千人もの軍団にも劣らない力を秘めたこの二人を行かせたい。**十六** そなたは高貴な身分の方でもあるが故、むしろ他の兵士たちと共に城門のところまで待機すべきであり、それは余の願いでもある。そして二人が「破壁車に」火を放ち、戻ってきた時（余はそれを確信するのだが）、もし敵の軍勢が二人を追ってきたならば、そなたには敵を押し戻すとともに、二人を助け、擁護してほしいのだ。」王はこのように述べ、その弁に対して男（ソリマーノ）は何も言わなかったが、不満を感じていないはずはなかった。**十七** するとイズメーノが言った、「あなた方に請う、出撃の時間を少し遅らせてもらえぬか。私はさまざまな成分を混合して、敵の車両に着火し、それを燃やすのに有効な火薬を作っている最中であるが故、その作業が終わるまで待つてもらえぬか。それに火薬が出来上がった頃には、車両の周りには警備兵たちの中には眠り込んでいる者もいるだろうから。」この提案が認められたので、二人はそれぞれの居所に戻り大いなる企ての実行に適した時を待った。

十八 クロリンダは銀が埋め込まれた鎧、装飾が施された兜、重々しい武器を傍らに置き、羽飾りや装飾が付いていない、錆のように黒っぽい色の鎧を身に着ける（不吉な事態を予感させる行為！）。こうすれば敵の兵士たちに見つからないで進むことができると思ったからである。そこには宦官のアルサーテ^四もいるが、かれは幼いクロリンダを生まれた時から育てた男であり、**十九** かのじよの後を追いついて、年老いた体に鞭打つて、いまでもかのじよに付き添って諸方を巡っていた。かれはクロリンダがいつも付けている武具を付けられないのを見て、

またかのじよが向かう先に大きな危険が待ち受けていることを察知して、心配を募らせ、出撃を断念するよう——白髪になるまでかのじよに仕え、奉仕の日々を懐かしく思い出す者として——繰り返し懇願するが、かのじよは受け入れようとしない。二十 そのためアルセーテはかのじよに遂に言った、「あなたの心はその悪しき状態のうちに頑なに留まろうとして、私の加齢による疲れも慈しみの気持ちも願ひも嘆きも受け入れることができないようなので、他のことをあなたに語って差し上げましょう。それはあなたの存在にかかわることではありませんが、あなたがご存じのないことです。それを聞いて、あなたはご自分の望みに従うか、わたしの忠告に従うかご判断ください。」かれは語り続け、クロリンドは視線を上げて、かれの話に聞き入った。二十一 「セナーポ^(五)はかつてエチオピアを統治し、おそらく今でも良き行政府に恵まれて同国の支配を続けているでしょう。この国では聖母^{キリスト}の御子の定めが遵守され、黒人たちもその信奉者になっていきます。私はその地で非キリスト教徒の奴隷でしたが、侍女たちに交じて女性が担う仕事に従事し、肌の黒い女王——黒い肌によつてその美貌は損なわれないのですが——に仕えておりました。二十二 セナーポ王は妻である女王を溺愛し、嫉妬から生み出された冷たい猜疑心は燃えるような恋心にも劣らないほど強烈です。病んだ情熱が引き裂かれた精神を次第に支配するようになり、王は女王を他の男たちから隠して、多くの空の目〔星々〕によつても発見されない閉ざされた場所に置こうとします。女王は賢明で従順な方なので、主人である王が望むことに喜びと平和を見出します。二十三 女王の居室は聖なる人物の事績が描かれた壁画で飾られていました。その壁画には白く美し

い顔立ちで、紅色の頬をした乙女が描かれ、その体は龍の傍にあつて、縄で縛られています。龍は一人の騎士^(六)によつて槍で突かれ、血まみれになつて息絶え、倒れています。女王はこの壁画の前でしばしばひれ伏して、心に秘めた自らの罪を告白し、涙して、祈ります。二十四 女王はやがて身ごもり、肌の白い娘（この娘があなたでした）を生みます。異様な肌の色に——そこに不可思議な奇蹟を認めたかのごとく——驚き、取り乱します。しかし王の人柄と苛立ちを知っていたので、熟慮の末——あなたの白い肌を見た王は、女王が夫婦の信義に背いたと邪推するかもしれないのです——出産を王に打ち明けないことにします。二十五 そして少し前に生まれた肌の黒い女の赤子を、あなたの代わりに王に見せようとしています。女王が閉じ込められていた塔には侍女たちと私しか住んでいなかったため、女王は私に——女王の下男であり、女王を心から崇拜していた私に——洗礼を受けていないあなたを預けました。この国では洗礼を（出生したばかりの赤子に）授ける習慣がなかったので、女王は生後間もないあなたに洗礼を受けさせることができなかつたのです。二十六 女王は泣きながらあなたを手渡し、遠いところに連れて行って育てるよう私に命じました。女王の苦悩を誰が言葉で表現できましようか、女王はあらゆる手段に訴えて嘆き、別れ際には幾度も抱擁を繰り返しました。涙ながらに接吻を繰り返し、悲痛な叫びは嗚咽によつて度々途絶ええました。そして漸く顔を上げて、言つたのです、「嗚呼、人知の及ばぬことを解し、わが心の内をも知り給う神よ、二十七 わが心が清純で、わが身体にも、わが婚礼の寢床にも汚れがなければ、どうか——こうしてお祈りするのは私のためではありません、私は他の〔夫婦間の関

係以外の」ところで多くの罪を犯し、あなたと向かい合うことすらできないう者ですから——罪なきわが娘を救い給え、私は母でありながら娘にみずからの母乳を与えることができません。娘が生きながらえ、誠実さだけを私から引き継いで、運を切り開く術は他の人から学び取るよう計らい給え。二十八 天上の戦士である方〔聖「ヨルジヨ」よ、あなたは邪悪な龍の餌食になっていた少女を救出されましたが、私がある祭壇に誓願の灯をともし、金や芳香を発する香を捧げてまいりましたことをご記憶ならば、わが娘のために祈ってください、娘がいかなる境遇にあつてもあなたに帰依する忠実な卑女となりますように。〕こう言うと、女王は黙して、心を閉じて内に籠り、死に襲われたように顔色を曇らせました。二十九 私は泣きながらあなたを受け取り、小さな籠に入れて外に連れ出し、草花や枝木で隠しました。こうした私の行動や他の行為を怪しむ人はおらず、あなたの姿が人目に触れることもありませんでした。私は誰にも気づかれずに歩み続け、不気味な木々が茂る暗い森の中へ入ったとき、目に怒りを宿した恐ろしい狼がこちらへ近づいてくるのを見たのです。三十 私は恐怖のあまり動転して、あなたを草の上に置いたまま、木に登ってしまいました。獐猛な獣は〔私が登っている木の〕近くに來ると、威圧的な頭を横に向け、あなたのほうを見ました。すると凶暴な狼の表情が温和で、優しいものとなり、態度も穏やかで、優美なものとなりました。狼はあなたにゆっくりと近づき、舌であなたを舐め、あなたは笑い、狼を撫でています。三十一 赤子のあなたは狼と戯れ、怖がることなく、狼の恐ろしい顔に手を伸ばします。狼は乳房をあなたのほうへ向け、授乳のときの姿勢を取り、あなたは乳房を掴みます。私はそ

の様子を、奇怪で恐ろしい出来事を見る人のように恐る恐る、分別がつかないままに観察しています。やがて狼はあなたが十分に乳を飲んだと思つたようで、その場を離れて森へ入っていき、三十二 私は木から降りてあなたを拾い上げ、先ほどまでの歩みを再開し、暫くして小さな村に着くと、そこであなたを秘かに育てることにしました。この村に私は〔地球の周りを〕回る太陽が人間に十六の月をもたらすまでの間〔十六か月間〕留まりました。あなたはまだ乳の匂いにする舌で言葉にならない声を発し、不確かな足取りながらも歩くようになっていました。三十三 しかし私はすでに老年の域に入る齡に達し、〔エチオピアから〕出発した際に女王から王室からの褒美として賜った金貨によつて十分に裕福になつたので、異国を放浪する生活に終止符を打つて、祖国〔のエジプト〕に戻り、慣れ親しんだ地で旧友たちに囲まれて暮らし、我が家の囲炉裏の火で寒さをしのぎたいと願うようになりしました。三十四 私は〔村から〕出発し、故郷のエジプトに向かつてあなたとともに進み、奔流となつて流れる川のところに着いたとき、背後から迫りくる盗賊と、行く手を遮る川の間に封じられるという羽目になりました。どうすればいいのか、大切なあなたを私から離さずして、この窮地を脱するには。私は川に飛び込み、片方の手で水をかいて、もう一方の手であなたを抱えます。三十五 流れはきわめて速く、川の中ほどのところで水が折り重なつて渦となつていますが、渦が最も激しく巻き、川底が最も深いところに私は押し流され、渦に呑まれ、深みへと引き込まれていきます。そのため、私がある腕から解き放つと、川の水があなたを水面に浮かせ、あなたを護り、川の流れと同じ方向に吹く風もあなたを後押しして、あなたをつつがなく

川辺の湿った砂地へと運ぶのです。私は疲労困憊し、息を切らして、やつとのことであなたのもとへたどり着きます。三十八 私は安堵し、あなたを抱きかかえます。やがて夜になりましたが、万物が深い静けさに包まれる頃、私は夢の中でひとりの戦士の姿を認め、その戦士は鞘から抜いた刃を私の顔に突き付けて、私を脅したのです。戦士は横柄な態度で言いました、《余はおまえに命じる、幼女の母親がおまえに真つ先に行くよう命じたことを実行せよ。幼女に洗礼を授けるのだ。幼女は天上で愛でられた身であり、幼女の世話を余は任されているのだ。三十七 余は幼女を見守り、危険から救っている。獣に憐みの情を、川の水に思慮を付与したのは余だ。おまえがこの夢を信じないならば、おまえに災いが降りかかるぞ、この夢は天の意思を伝えるものなのだ。》戦士はこう言うと言いました。私は目を覚まし、起き上がり、一日の開始を示す陽光が射すやいなや、その場所から離れました。しかし私は自分の信仰に適っていると考え、「夢に現れた戦士の」影が虚偽を語っていると判断したので、あなたを洗礼や、三十八 あなたは母親の願いのことを気に留めなくなりました。そのため、あなたはイスラム教徒として育てられ、私は真実をあなたに隠しました。あなたは成長し、武器を手にしたときには度胸においても力量においても（女性としての）性の限界や自然の理をはるかに超越し、名声や封土を獲得したのですが、その後のあなたの人生についてはあなた自身をご存じでしょう。また下男である私が父親のごとく、戦地に赴くあなたを追ってきたこともご記憶でしょう。三十九 そして昨日の明け方、私の意識は死にも似た深い眠りの中に沈んでいましたが、かの戦士の影が夢の中に現れたのです。しかし戦士は以前にも増して怒って

いるようで、声もより力強いものでした。《知るがよい、裏切り者よ、戦士は言いました、《クロリンダの命が〔現世の命から永遠の命へと〕移ろい、かのじよの運命〔を決定づける信仰〕も改められるべき時が近づいた。おまえの意に反して、かのじよは私のものとなり、悲しみはおまえのものとなるであろう。》こう言って、戦士は大気の中を飛び去りました。四十 だから今こそ、私の大切な方よ、あなたに悟っていたいただきたいのです、只事ならぬ出来事が天によって引き起こされ、あなたの身に危険が迫っているということを。私には定かではありませんが、親の信仰に背く者をおそらく良かれとされないでしょう。ひよつとすると、この〔キリスト教の〕天は真理を説いているのかもしれない。嗚呼、私は願います、あなたが武器を置き、燃え上がった心を抑えてくださることを。》アルセーテはこう言うと言った。泣きじゃくる。クロリンダは思いを巡らせ、不安を感じるが、それは同じような夢を自分も見ることが心にわだかまっているからである。四十一 やがて晴れやかな表情を取戻し、アルセーテに向かってこう言った、「私はいま私が正しいと思う教義に従うことにします、それはかつてあなたが生育に必要な乳とともに私に飲ませ、今となっては〔その正当性に〕疑念を抱かせようとしているかの〔イスラム教の〕教義です。私は怖れによって計画と武器を放棄するつもりはなく、そのような行動に高潔な心を持つ者は出はならないと思うのです、たとえ命ある人間を脅かす恐ろしい顔をした死神に迫られたとしても。」四十二 クロリンダはそれからアルセーテを慰めるが、やると決めた企てを実行するべき時がきたのでその場を離れ、共に危険に身を投じるかの武人〔アルガンテ〕のもとへと進む。イズメーノが二人に近づき、すで

に両者の全身に漲っている闘志をさらに掻き立て、瀝青と硫黄が詰められた二つの玉と、銅の容器に入れられた松明を手渡す。

四十三 二人は暗闇の中を密かに出発し、大股で足早に斜面をともに駆け降り、敵の車両が聳える地点のすぐ傍までいまや到達する。かれらの士気は一気に高まり、燃え上がった心臓に収まりきらないほど膨らむ。激しい怒りに導かれ、周囲を炎と血の海に変えようとする。警備兵が二人を発見し、合言葉を言うように求める。**四十四** 二人が黙って先へと進むのを見て、警備兵は大声で何度も叫ぶ、「曲者だ、曲者だ!」、勇敢な二人組はもはや姿を隠さず、一気に駆け出す。稲妻や白砲が光を発すると同時に轟音を炸裂させるように、瞬く間に二人は敵の軍勢に迫り、到着し、斬りつけ、進路を開き、先へと向かう。**四十五** いかにも多くの武器と攻撃を持って阻止を試みても、二人の作戦が成功に至るのは定めなのだ。かれらは隠し持っていた松明を取り出すと、すぐに火を焚き付けに移し、木製の破壁車に着火して回る。這うように広がった炎がこちらで大きくなっていく様を、色濃い煙が瞬く星の光を覆っていく様を、誰がうまく言葉で表現できようか。**四十六** 渦を巻いた煙に包まれて黒っぽい炎の玉が空に立ち昇るのを見るがよい。吹き付ける風によって大火は勢いを増し、飛び散った炎を呑み込んでいく。フランク人たちは大火災に驚き見入るが、すぐに武器を手にする。戦場で威容を誇った巨大な破壁車が崩れ落ち、「その建設に費やされた」長時間の作業が一瞬のうちに水の泡に帰する。**四十七** キリスト教軍の二つの部隊が火災の現場にただちに到着する。アルガンテが脅し文句を吐く、「あの炎をおまえたちの血で消

してやるぜ」、そう言っただけに立ち向かう。アルガンテとクロリンダは離れないでいるが、次第に押し戻され、「町がある」丘の上の方に後退していく。キリスト教軍が雨の後の川のように勢いを増し、二人を追撃して丘を登っていく。**四十八** 黄金の扉^(七)が開かれ、武装した部下の兵士たちを引き連れて王がそこへやって来る、立派な戦果を挙げた二人を——かれらが幸運に助けられ生還するならば——王は出迎えようというのだ。二人が扉の敷居を跨いで中に飛び入ると、続いてフランク人兵士たちがどつとなだれ込む。しかしソリマーノがフランク人たちを迎え撃ち、退散させると、扉が閉められ、クロリンダだけが外に残される。**四十九** かのじよが締め出されたのは、扉が閉められたときに行動を起こしたからであった。アリモーネに攻撃されたので、かのじよは怒心頭に発して追撃し、この敵兵を倒した。勇猛なアルガンテはクロリンダが自分の傍から離れたことにまだ気づいていなかった、戦闘と雑踏と黒い砂埃によって心に余裕を失い、状況を見極めることもできなかったからである。**五十** クロリンダのほうは敵兵を血祭りにあげて怒りを鎮め、落ち着きを取り戻したものの、城門が閉じられて、自らも敵兵に取り囲まれていることに気づき、死を覚悟した。しかし誰からも注視されていないことを悟り、この窮地を脱するための奇策を思いついた。キリスト教軍兵士の一人であるかのように振る舞って、見知らぬ兵士たちの間に黙って身を置くと、キリスト教軍兵士たちは誰一人としてかのじよの存在を怪しまなかった。**五十一** 密かに悪事を働いた後に黙って森に入り、姿をくらます狼のごとく、混乱に乗じ、薄暗い大気に紛れて、かのじよはその場から立ち去ろうとしていた。唯、タンクレーデイだけはかのじよがイスラム

教軍の兵であることを見破っていた。タンクレーディは少し前にその場所に到着したのだが、それはクロリンダがアリモーネを殺した時であった（八）。タンクレーディは「それがクロリンダであることは知らずに」かのじよの姿を見て、狙いをつけ、後を追いついたのであった（九）。

五十二 タンクレーディはかのじよと武器を交えて対決しようとする。かのじよが男であり、決闘を挑むにふさわしい相手と思っただけだ。女騎士は丘の高みを指して弧を描くように進み、その先にある別の城門から町の中に入ろうとする。猛烈な勢いでかのじよを追うタンクレーディは、まだ追いつくには至っていないが、その武器の軋む音がクロリンダの聞こえるところとなり、かのじよは振り返って叫ぶ、「おお、貴様は何をもたらずのか、かくも急いで駆けてきて?」。かれは応える、「戦いと死だ。」五十三 「戦いと死は貴様に」、かのじよは言った、「貴様が求めるなら、貴様にそれを与えてやるう」、そう言う立ち止まって構える。相手が徒歩であるので、タンクレーディは馬から降りて、馬を使わずに戦おうとする。両者は鋭く研がれた剣を握りしめ、戦意を昂揚させ、怒りをたぎらせる。二人の果し合いが始まり、その様はさながら嫉妬と怒りに駆られた二頭の牡牛のようである。五十四 かくも記憶されるべき事蹟であればこそ、明るい太陽によって明るみにされ、大入りの劇場で演じられるにふさわしい。夜よ、そなたの暗い胸の奥に収められ、人々が忘れてしまったこの輝かしい戦いの顛末を、私が引き出して、これからの世にその仔細を語り継ぐことを許し給え。かれらが不朽の名声を得ますように、そしてこれらの栄光を証言するそなたの闇も歴史に刻まれ、輝きますように。

五十五 両者は相手の一撃をかわそうとも、払おうともしなければ、後退しようもしない。ここでは武術など問題ではないのだ。偽りの攻撃や、力を込めた攻撃や、途中で中断する攻撃を仕掛けることもない。闇の中の猛烈な闘いに技巧が介入する余地はない。聞くがよい、剣と剣とが、刃の中心部で激しくぶつかり合う音を、足が地面から離れることはない。足は止まっても、手は動き続け、振り下ろされた剣も、突き出された剣も、必ず相手に的中する。五十六 「相手に攻め込まれたことを」恥じる気持ちが当人の怒りを掻き立てて復讐へと向かわせ、復讐は恥じ入る気持ちを今度相手を起こさせる。よって相手は仕返しに出て、しかも即座にやり返そうとし、それが「双方の間で」繰り返され、「攻撃の」口実がそのつど編み出される。闘いは時を追って乱戦、そして鏢迫り合いと化し、剣は役に立たなくなっていく。両者は剣の握りで互いに相手を打ち、荒れ狂い、手加減することもなく、兜と兜を突き合わせ、盾と盾を突き出して押し合う。五十七 三度にわたり騎士はその逞しい腕で女戦士を抱きしめ、そのたびにかのじよはほぐれ難い絡みから身を解き放つが、愛人との絡みではなく、怒りに駆られた敵との絡みなのだ。両者は闘いに戻り、相手に多くの傷を負わせた太刀を血で染めていく。疲れ果て、息を切らした双方は互いに引き下がり、長い消耗戦を終えて息をつく。五十八 両者は互いに相手を見て、傷ついた体の重みを剣の柄で支える。東の空に夜明けの光が射し、最後まで残った星の輝きはすでに弱々しい。タンクレーディは相手が自分より多くの血を流し、自分がさほど傷ついていないことを察知する。それはかれにとつて喜ばしく、誇らしいことなのだ。嗚呼、少しでも順境の息吹を感じれば驕り高ぶる浅はか

な人間の心よ。五十九 哀れな男よ、なにが嬉しいのか？ああ、勝利は悲嘆となり、勝ち誇ることは後悔となるであろうに！おまえの眼は（もし苦惱を克服して生き延びるならば）かの血の一滴を大量の涙でもって償うであろう。血にまみれた二人の戦士は戦いをやめ、しばし黙って見つめ合った。やがてタンクレーディが言葉を発し、相手に名を明かすよう求めた。六十 「沈黙で覆われた場でわれわれが果し合いをしていいることは、われわれにすれば誠に嘆かわしいことだ。この戦いに対する称賛とその証言者を邪悪な運命がわれわれから奪っているのだから、（もし戦いの最中さなかに願いの事をすることが許されるならば）私は貴様に乞う、貴様の名と貴様の身元を私に教えよ。そうすれば、私が敗れたならば誰が私の死を弔い、私が勝ったならば誰が私の勝利を誉めるのか、私は知ることができるから。」六十一 勇ましい女は応える、「私が普段明かさないことを明かすよう求めても無駄だ。私がが誰であるにせよ、貴様が前にしているのは巨大な「塔」を燃やした二人のうちの一人だ。」タンクレーディはこの返答を聞いて怒りを募らせた。そして「貴様は時機を得ずして「自分が放火者であることを」明かした」と言つて、さらに続けた、「貴様が言ったことも、言わなかったことも、無礼な野人め、私の報復を同じように受けることになる。」六十二 両者の心に怒りが再燃し、弱り切っているにもかかわらず、両者は戦いへと向かう。嗚呼、恐るべき闘いよ、そこには技もなければ、旺盛な生命力もない、それらに代わって荒れ狂う双方の怒気がある！双方の太刀は、どこに打ち込まれようとも——武器に当るうが、肉に食い込もうが——何と血なまぐさく、引き裂かれた切り傷を生み出すことか！魂が体から抜け出ていないのは、憤怒がそれを心臓に留め置

いているからだ。六十三 深遠なエーゲ海がその海面を揺り動かし、荒らしてきた北風と南風が止んでも時化しげつづけ、荒く大きな波音とうねりをしばし保っているように、両者は体内のすべての血を流し、太刀を振り下ろす腕力を使い果しても、戦い始めたときの闘志を保ち、その勢いでもって相手を傷つけ続けた。六十四 だが、いまやクロリンダの命が宿命によって終わる時となった。かれは剣の先端を美しい胸に打ち込み、そこに突き刺さった太刀は貪欲に血を吸う。金の刺繍で飾られ、乳房を包んでいた軽やかで柔らかな外衣に、熱い血が川のように流れて滲みていく。かのじよはいまや死を悟り、傷つき、力が失せた足の機能は失われる。六十五 かれはあくまで勝利に執着し、深手を負った乙女に迫り、攻撃の手を緩めない。かのじよは倒れつつ、か細い声を絞り出し、最後の言葉を発した。それは新たな感情を、信仰と慈愛と希望から成る感情を、かのじよに吹き込む言葉であり、神がいまかのじよに与える徳である。現世において神に従わなかったかのじよは、死に至って神に仕える下女になろうとする。六十六 「友よ、あなたは勝ちました。私はあなたを許します…あなたも許してください、どうなっても構わない私の肉体ではなく、私の魂を。さあ、私の魂のために祈ってください、そして私のあらゆる罪を清める洗礼を私に授けてください。」こうした言葉を唱える弱々しい声にはどこか柔らかで、哀調を帯びた響きがあり、その響きはかれの心に降りて行き、あらゆる怒りの感情を消し、かれの目に涙するよう促し、強いていく。六十七 そこから少し離れた山肌の窪みに水が湧き、音を立てて流れる小さな川となっていた。かれはそこへ走つていき、兜を泉の水で満たすと、悲嘆にくれた表情で、

厳粛で、聖なる儀式を行うために戻ってきた。兜の緒を解き、まだ見ぬ顔を露わにしようとするとき手が震えるのを感じた。顔を見て、誰であるかを悟り、言葉を発することも、動くこともできなかった。嗚呼、何と酷な発見、何と酷な認知！六十八 かれはこのような状態になっても死にはしなかった、それはかれが全身の力を一時的に奮い起こし、その力を行使して心臓が止まらないよう監視したからである。そして悲しみを抑えて、おのれが自らの剣で殺した人に洗礼の水をふり掛けて、「永遠の」命を与えることを欲した。かれが聖なる言葉を唱えている間、かのじよの表情に喜びが広がり、笑みが浮かんだ。歓喜して、晴れやかに死を迎える段になり、かのじよは言うかのようだった、「天が開かれました、私は安らかに旅立ちます」と。

六十九 かのじよの白い顔が、葦と百合が掛け合わされたように、美しく青みがかっていく。天をしかと見据えるかのじよに、天と太陽が慈しみの視線を送っているようである。言葉をかける代わりに、かのじよは手袋から出した冷たい手を騎士に向けて上げ、かれに対して平和を誓う。こうして美しい女性^{にょしょう}は逝くが、その顔は眠^{かみせ}っているように見える。七十 高貴な魂が体から出たことを認めると、かれは先に高揚させた気力を緩め、おのれの身の支配を激しく、狂気を含んだ苦しみに委ねる。そのためかれの生命は心臓にだけ宿り、その狭い領域に押し込められたが、かれの感覚と表情には死の影が伸びていく。顔面蒼白で、言葉がなく、動きがなく、大量の血を失ったかれは、生気を失い、死人とすでに変わりはしない。七十一 憤り、自己嫌悪に陥ったかれの魂は「おのれの肉体との」弱い結び付きを自ら断ち切って、お

のれに少し先だつて翼を広げ、空に向かって飛び立った美しい魂を後に追おうとしたであろう。だが、その場所にフランク人の兵士たちが水や食糧の調達のために偶然やって来て、かろうじて生きてはいるものの、女性^{にょしょう}の死を悼んで死んだのも同然の騎士を、その女性と共に運び去る。七十二 ^{コッフレッド}かれらの統率は付けている鎧から「運ばれてきたのが」キリスト^{クリスト}教軍の君子であるに気づき、一行のもとへ駆け寄ると、息絶えた美しい女戦士の姿をすぐさま認め、「二人の決闘者が共に死んだという」異常な事態に心を痛める。異教徒の屍と思つたものの、その美しい遺体が放置されて狼の餌食となることを望まず、兵士たちに二人を担がせて、タンクレーデイの天幕に向かわせた。七十三 傷ついた騎士はゆっくりと静かに運ばれていく間、まったく意識を取り戻さなかった。しかし、かすかな呻き声を発しており、そのことから、かれが生きているということが分かる。ところが、もう一人の者は無言で動かないが故、その体から魂が抜けていることは明らかである。こうして両者は到着し、並んで安置されたが、異なつた部屋にその後移された。七十四 横臥した騎士の周囲を痛々しい表情の従者たちが直ちに取り囲み、かれの体にさまざまな処置を施す。かれの眼にうつすらとした陽光が戻ってきて、かれは治療を受けていることを感じ、人の声を聞き取る。だが、かれの心は自らに生気が戻ってきたことにまだ疑いを抱き、困惑する。かれは驚きをもって周囲を見渡し、自分に付いている人たちが誰であり、自分がどこにいるかを解する。そして弱々しく、しゃがれた声で言う。七十五 「私は生きていますのか？ まだ息をしているのか？ この不吉な日の呪わしい太陽をまだ目にして

いるのか？この日は「夜の闇によって」隠された私の過ちを暴き、私

の罪を弾劾するもの！嗚呼、臆病で怠慢なわが手よ、人を殺めるあらゆる方法を知っているおまえは、無慈悲でおぞましい死の手下であるおまえは、今、なぜこの「私の」邪悪な命の糸を断ち切るうとしないのか？七十六 この胸を突き刺せ、おまえの握る残酷な剣で、私の心臓を引き裂け。だが、おまえは容赦なく残忍なことをすることに慣れていくから、私から苦しみを取り除く行為を慈悲と考えているのかもしれない。それなら私は、記憶に値する不幸な愛の中でもとりわけ哀れな愛の当事者として生きよう、そのような者が犯した重罪に対する唯一の相応しい罰は不本意に生かされるといふことなのだ。七十七

生きよう、苦悩と悲嘆という当然の報いに耐えながら、放浪する狂人となつて。私の最初の過ちを私に突きつけるであろう陰気で、孤独な亡霊に、私は怯えるだろう。そして私を絶望の淵に追いやつた太陽を憎み、忌み嫌うだろう。私は自分自身にも恐れを抱き、自分からつねに逃れようとするが、自分がつねに自分に寄り添っていることに気づくだろう。七十八 だが、どこにあるのだ、嗚呼、貞淑で、美しい人の亡骸は？私の蛮行に害されなかつた部分は、獐猛な獣に食られたのではないか？嗚呼、それは餌食となるにはあまりにも尊く、嗚呼、あまりにも甘美で大切なもの、これほど貴重なものが獣の食となるとは！暗闇がまず私を、次に森が獣を唆して、嗚呼、不幸な肉体を攻撃をさせたのだ！七十九 愛しい亡骸よ、あなたがいるところに私は参りましょう。そしてあなたがそこにまだいるなら、私はあなたのもとから離れないでしょう。でも、もしあなたの美しい四肢が獣に食べられていくなら、私も同じ獣に食べられ、あなたの四肢が入っている獣の腹の中に閉じ込められたいのです。あなたの四肢といっしょにいる

ことができるなら、それがどこであろうとも、私にとっては幸いで、尊い墓所なのです。〔一〕八十 哀れな男はこのように語つた、そしてかれの危惧する遺体が「かれのいる」天幕の中にあるということを知りながら。すると通りがかった稲妻が雲を照らして走り去るやうに、かれの曇つた顔も晴れたように思われた。傷ついて、動くことが困難な体を病床から起こし、やつとのことで引きずつて、ふらつく足取りで言われた場所へ向かつた。八十一 だが、そこへ来ると見たのだ、かの美しい胸にかれが自らの手で刻んだ目を背けたくなるやうな傷と、そして光に照らされなくとも晴れやかな夜の空のごとく青光りする顔を。従者が傍らにいななければ倒れていたであろうほど激しく身震いし、それから言つた、「嗚呼、死を甘美なものに変えても、わが運命を甘美なものにすることはできない顔よ！八十二 嗚呼、友情と平和を誓つて私に軽やかに差し伸べられた美しい右手よ！そなたらは今、嗚呼、如何なる状態に在るのか？如何なる気持ちで、私はそなたらに近寄ればよいのか？優美なる四肢よ、悲しみを誘うおぞましい傷は、私の野蛮で非道な怒りに起因するものではないのか？嗚呼、わが手に劣らず無慈悲なわが目よ、手が生み出した傷を、そなたは「乾いた眼で」見ている。八十三 傷を見て、そなたは涙しないのか？「それなら」今こそ、わが血液よ、涙が向かわないところへ向かうのだ。」こう言つて独白を打ち切ると、死の願望を何としても満たそうとするかのように、おのれの体に巻かれた包帯を引き裂き、おのれの傷を開いたので、痛ましい傷口から血液が川のごとく流れ出る。死んでも不思議ではなかつたが、強烈な痛みによつて失神したので、命を落とすには至らない。八十四 タンクレーディは病床に

引き戻され、体から離れようとするかれの魂は、日々の煩わしい務めに呼び戻された。だが、かれの不幸な身の上や苦悩について、饒舌な噂がいまや黙っているはずがない。「噂を聞いて」敬虔なるゴツフレードや、まだった友人たちの一団がタンクレーデイの天幕にやって来る。しかし厳しい批判も、愛情が込められた懇願も、癒され難い魂の苦しみと和らげることはできない。八十五 敏感になつてゐる体の部分の深い傷が触られると痛み、傷自体も悪化するように、苦しみ喘ぐ者は思いやりのある言葉をかけられると、心をかえつて掻き乱す。だが、タンクレーデイのことを——傷ついた雌の子羊に接する良き牧者のごとく——気にかける尊師ピエート口は、長きにわたつて錯乱状態に陥つたかれを重々しい言葉で戒め、立ち直らせようとする。八十六 「おおタンクレーデイよ、タンクレーデイよ、そなたは本来のそなたから、出征したときのそなたから、いかにも異なつた人となつてしまわれた。そなたの耳をかくも聾とするのは誰なのか？そなたを盲にするほど分厚い黒雲は何なのか？そなたに降りかかつた災いは、天の説諭なのだ。天使の姿が見えぬか？その言葉が聞こえぬか？そなたを諭し、そなたが踏み外した道をそなたに示し、再び歩ませようとするものです。八十七 キリストの騎士が第一に成すべき任務を遂行するよう、天はそなたを再び呼び給うが、そなたはその任務を放置して、（嗚呼、恥ずべき変貌）神に従わない乙女の情人になることを欲した（十二）！災いは神意によつて引き起こされたのであり、慈悲深い怒りの神はそなたの罪深い愚行を鞭打ち給うが、天における鞭打ちは柔らかで、そなた自身をそなたの魂の救済の立役者にしようとするものなのだ。そなたはこの神のご意思を受け入れられないのか？八十八 では拒否するの

だな、嗚呼、忘恩の徒め、そなたを救おうとする天の賜物を、そして天に反旗を翻すのだな！惨めな者よ、どこへ駆けていくのか、止むことのない嵐のごとき愛の苦悩に囚われて。そなたがいる場所は、地獄の深淵の上方で、そなたの体は傾いて今にも転落しそうだ。そなたにはそれが分からないのか？気づくのだ、私は願う、自分を取戻すのだ、そなたを二度の死（肉体の死と魂の死）へと導くかの苦しみ（愛の束縛）を断ち切るのだ。」八十九 ピエート口が話し終えると、タンクレーデイのうちに魂の死への恐怖が生じ、肉体の死に対する望みを減じさせた。かれの心は尊師の慰めを受容するようになり、その内部で吹き荒れる苦しみの嵐も勢いを弱める。だが、それでもかれは時折呻き苦しむ、歎きの言葉を、或る時は独白として、或る時は肉体から離れたクロリンダの魂に語りかけて吐き、その声は天にいるクロリンダにおそらく聞き届けられる。九十 日が沈むころ、日が昇る頃、かのじよを力のない声でタンクレーデイは呼び、祈り、涙ぐむ。その様は、残忍な村人にまだ羽気の生えそろつていない雛鳥を巣から奪われたナイチンゲールが、悲しく孤独な夜に哀れな声で鳴き、その声が森や大気に響くかのよう。夜が明ける頃ようやく目を少し閉じ、涙にぬれた目に眠気が忍び寄る。九十一 すると夢の中で、星の刺繍の入った衣装をまとつて、かれが溜息を吐いて憧れる愛おしい人が現れる。地上にいたときよりもはるかに美しいのは、天상의な輝きに包まれているからであり、生前の面影は保たれている。慈愛に満ちた優しい動作でかれの涙にぬれた目を拭い、こう言うかのようである。「私がどれほど美しく、どれほど幸せか、ご覧になつてください、私の大切な方よ、私を見つめることで、苦しみを和らげて下さい。九十二 私がこのよ

うになれたのは、あなたのお蔭です。あなたは凶らずも、生きた人々が暮らす世界から私を引き離し、私はあなたの慈しみにより、幸いなる人々や神の使いたちが座す神の膝元に至ることができました。ここで私は至福のうちに神の愛に包まれ、ここにあなたの席も用意されることを願っております。大いなる太陽(神)の傍で、永遠の光を浴びて、あなたは神の美と私の美を凝視なさることになるでしょう。九十三もしあなたが神との関係を断たず、邪悪な感覚に誘導されて正道から外れないように努めるなら、生き続けてください、そして知っておいてください、私があなたを愛しているということを。その愛はあなたに隠すものではなく、天国の魂が現世の人に向けることのできる最も強い愛なのです。」話している間、かのじよの眼は愛の炎で燃え、その燃え上がる様は地上では考えられぬほど強烈だった。そして自らが放つ光の奥へと入っていく、消え、タンクレーディは神秘的な慰めを心に覚えた^(九十二)。九十四 穏やかな気持ちでかれは眠りから覚めると、看護者たちの手慣れた介護に身を委ね、その合間に、先ほど高貴な魂が宿って具象化した愛おしい亡骸を埋葬するよう命じる。かくして作られた墓は高価な石材を使ったものでもダイダロス^(九十三)の手で彫られたものでもなかったが、最良の石の確保とそれを加工する石工の選出は、戦時下ゆえに制約はあったものの慎重になされた。九十五 遺体はタンクレーディの指示により、灯された松明を持つ人々の重々しい行列とともに墓へと向かい、かのじよの武具は葉のついていない松の枝に吊るされ、戦利品のごとく墓の上に掲げられた。翌日、騎士は傷ついた体を努めて早く病床から起こすと、憐れみと敬愛の念を抱いて貴い遺骨が埋められた墳墓へと向かった。九十六 その墳墓はかれ

の魂を生きたまま入れるよう神が定めた給うた悲しみの牢獄であり、そこに着いたタンクレーディは青白い表情で、生気がなく、黙って、ほとんど身動きせず、墓石を見つめた。目から溢れるほどの涙を流しつつ、ついに「哀れ」と消え入るような声で叫び、言った、「嗚呼、わが愛の炎を中に閉じ込め、わが涙に濡れた愛おしく、価値ある石よ、九十七 あなたは死んだ灰ではなく、愛神が住処とする生きた灰を納めているのであり、あなたから噴き出ている炎はこれまで私が慣れ親しんだ愛の炎に他なりません、確かにその炎は以前ほど甘美ではありませんが、わが心はその炎で以前と同じように熱せられます。さあ、わが嘆息を、そして悲しみの涙にまみれたわが接吻を受け入れ、せめてあなたが——私にはできませんから——あなたの中にいる愛おしい亡骸にそれらを届けてください。九十八 それらを亡骸に捧げてください、「往生したクロリンダの」美しい魂は、たとえ己の美しい亡骸に目を向けたとしても、わが愛とあなたの慈悲に立腹しないでしよう、天上には憎しみや怒りというものがありませんから。わが望みは美しき魂がわが過ちを赦すことであり、数多の苦悩に打ちひしがれたわが心はその期待の内におみ安らぎを見出します。わが心はわが手のみが邪悪であると認識し、あの方を想いつつ生きたのであれば、あの方を想いつつ死ぬことも苦としません。九十九 そして愛を捧げつつ死ぬ日は、それが何時であるにせよ、至福の日です。しかし更に大きな幸いは、「石である」あなたが、迷いつつ近寄ってきた今の「生ある」私と同じような「死に至った」私を、その時に受け入れてくれるということなのです。友愛の絆で結ばれたわれらの魂が天に住まい、われらの亡骸が一つの墳墓の中に置かれますように。命あるうちに叶

わなかつたことが、死によって叶いますように。嗚呼、そう願うことを容認し給え、崇高なる運命よ！」百 その頃、包囲されたエルサレムの市民たちは戸惑いつつも「クロリンダの身の上に降りかかった」邪悪な出来事について噂する。かのじよの死が真実であると判明すると、その情報は方々に伝わり、街中の至る所で叫びや婦人たちの泣き声を含んだ痛ましい声が飛び交う。たちまち拡散する情報は、戦いで陥落した都市の家々や神殿に放たれる炎や情け容赦なき兵士たちのようである。百一 だが、すべての人々の注目を集めるのは、哀れな歎き声を発し、悲痛な表情をしているアルセーテである。かれは精神が極度に硬直してしまつたので、他の市民たちのように涙するだけでは苦しみから解放されない。白髪には汚い塵がこびり付き、自らの顔と胸を手で打っている。その時、かれを見ている群衆の中にアルガンテが割って入り、次のとき演説をする。百二 「わしは真に望んだのだ、勇敢な女戦士ウロリダの後をすぐに追うことを、かのじよが城門の外に残っている」と最初に気づいたあの時、同じ運命にわが身を置くべく、わしは急いで城門の方へ戻つた。わしが何をやらなかつたというのか、何を言わなかつたというのか？ わしは城門を開けるように王に懇願した。王は自らが握る統帥権をかざして、私の願いと抗議に聞く耳を持たなかつた。百三 嗚呼、あの時に外へ私が出ていたならば、女戦士を危機から救つてここへ連れ戻したであろうに、さもなければ、かのじよが大地を赤く染めた場所で私も栄誉の死を遂げたであろうに。しかし私に出来ることが他にあつたというのか？ 私以外の人々や神々は私とは異なつた判断をしたのだ。かのじよには死が運命づけられていた、「こうなつた以上」私がやらなければならないことを私は心得ている。

百四 聞け、エルサレムよ、アルガンテの誓いを。聞け、天よ。わしが誓いを破つたならば、わしの頭上に雷を落とせ、わしは非道なフランク人に対して復讐を誓う、女戦士の仇を打つことはわしの務めだ、わしはタンクレーディの胸を突き刺し、その呪わしい死骸を鳥の餌にするまでは、腰にぶら下げたこの剣を置きはしない。」百五 かれがこう言うと、人々はかれの最後の言葉に拍手を持つて応えた。約束された復讐は、嘆いている者にすれば、思い浮かべるだけでも慰められるものであつた。嗚呼、何と空虚な誓いであろうか！ というのも、勇ましい誓いは正反対の結果を生むことになるのだから。この男は自分がすでに倒したと言っている相手と決闘して、打ち負かされることになるのだから。

第十三歌

一 だが、城壁を攻める巨大な車両が崩れ落ちて瓦礫と化すや（十四）、イズメーノは町の安全が以後脅かされることがないように、新たな防御の方策を直ちに練り始める。森が提供する木材をフランク人たちが得られないようにして、傷ついたシオンエルサレムの町を陥落に至らしめる新たな「塔」の建築を阻止しようとする。二 高い木々が繁茂する森は（十五）キリスト教軍の陣営からさほど遠くないひっそりとした谷間にあり、その不気味な古木は周囲一帯に不吉な影を投げかけている。そこでは太陽がもつとも明るく輝く正午の時間においてさえ、夜明けや夕暮れ時の曇つた空に見られるような、弱々しく、色褪せて、陰惨な光しか射し込まない。三 しかも、太陽が沈むとたちまち、この場所は暗闇や雲や霧に包まれて、地獄のそれにも似た恐怖を人に与え、その眼を

見えなくし、その心を不安で満たす。羊飼いや牛飼いはここに群れを——放牧のために、あるいは陰で休ませるために——連れてこようとしなないし、旅人も道に迷わない限りこの森を避けて進み、遠く離れたところから「危険な場所として」指し示す。四 ここに集まるのは魔女たちであり、それぞれの魔女たちといっしょにその愛人「悪魔」もやってくる。愛人は雲に乗って来るが、或る者は恐ろしい龍の表情を、或る者は醜い山羊の表情をしている。おぞましい集会、それは「魔女たちが」切望する善^(十六)の偽りの幻想を「魔女たちに」抱かせ、不潔で汚い儀式を伴った淫らな宴会や冒瀆の結婚式を「魔女たちをして」挙行させる。五 このように信じられていたので、その地の住民たちは不気味な森の木の枝をけつして折らなかつた。だが、フランク人たちは森の木を切つた、と言うのも、この森でしか大きな「塔」を作るための資材を確保できなかったからである。さて、この森にかの魔術師^(イスマー)はやって来たのであつたが、それは「塔」が燃やされた夜の次の夜のことであり、かれは周囲が静まり返つたことを確かめると、地面に円を描き、記号を刻んだ。六 そして円の中で身に着けていた帯を解き、片足を素足にすると、力強い声で呪文を唱えた。東の方向に三回顔を向け、太陽が沈む方向にある国々の方を三回振り向くと、埋葬された人間を墓から引き出し、動かすとされる棒を三回振つて、素足で地面を三回踏みつけて、恐ろしい叫び声で語り始めた。七 「聞け、聞け、轟音が響く中で稲光を受けて星々から落とされた者たち^(十七)よ、おまえたちの中には空中を彷徨つて嵐や暴風雨を引き起こしている者もいれば、罪深い邪悪な魂たちに永遠の涙を流させている者もいるが、冥界に住むおまえたちと、炎に包まれた悪の国々の支配者であ

る方に向かつて、わしはいまここで呼びかける。八 この森に憑くのだ、わしが印をつけたこれらの木々に。肉体が魂にとつて宿であり衣服であるように、それぞれの樹木におまえたちは棲みつき、木を倒そうとするフランク人たちを追い払い、さもなければ少なくとも動揺させ、おまえたちの怒りに奴らが恐怖を抱くようにするのだ。」こう述べて、さらに冒瀆的な言葉を付け加えたが、それを口述することは邪悪な舌を持つ者でなければできない。九 イズメーノの語りに夜の暗れた空を飾る発光体「星々」は青白く輝き、三日月は動揺してその端の部分雲で覆い、外にもはや現れ出ようとしなない。イズメーノは苛立つて再び叫ぶ、「悪霊どもよ、おまえたちはわしの呼びかけにもかかわらず、なぜ未だに来ないのか？この著しい遅滞は何故だ？さては、もつと力強く、威圧的な声を待っているのか？十 久しく頼ることがなかつたと言え、魔術の効果を最大まで高める策をわしは忘れてはおらぬぞ。血を塗つた口で、かの強大で怖れた方^(十八)の名前を言うことはわしにもできる、その方に対しては地獄^{デイト}も決して逆らつたり無視したりせず、地獄の王も即座に従属した。されば何故に：何故に：」かれはさらに何か言おうとしたが、その時には魔術がすでに効き始めてきたと感じていた。十一 無数の、数えきれないほど多くの悪霊がやって来て、その中には大氣中に留まり彷徨つていた者もいれば、大地の薄暗く陰鬱な底から出てきた者もいた。これらの者たちは武器を持って戦うことを禁じたかの大きいなる禁令^(十九)のゆえに動きが遅く、まだ当惑した様子であつたが、その禁令はかれらがこの森へ来て、木の幹や葉に宿ることは禁じていなかった。十二 魔術師は自らの企みがいまや功を奏したと思つたので、満足げな表情で王のとこ

るへ戻った。「わが主人よ、あらゆる不安はお捨てになり、ご安心ください。あなたの王座はいまや揺るぎないものとなり、フランク人たちは聳え立つ車両をもはや思いのままに修理できないでしょう。」こう言つて、魔術の効果^{まほう}を詳らかに語つた。十三　そして付け加えた、

「こうした私の手柄に劣らず、私が喜ばしく思つておりますことも申し上げましょう。それは近々、獅子の星座のもとで火星が太陽と重なるといふことで、その時に両天体から発せられる高温の光は、風によつても、雨や露の元となる雲によつても和らげられないでしょう。天体の位置から判断するには、災いを引き起こす苛酷な干魘が予想されるのです。十四　灼熱の太陽に焼かれたナザモーニ族やガラマンティ族^{二七}が耐え忍んでいるような暑さに、この地方も見舞われるでしょう。しかしエルサレムにいるわれわれにとつて、暑さはさほど深刻な問題になりません、町の中には水が豊富に蓄えられ、爽やかな日陰や避難所も沢山あるからです。ところが暮らして適さない乾いた地にいるフランク人たちは暑さに耐えることができないでしょう。かれらはまず氣候に屈し、次にエジプト軍によつて容易に打ち負かされるでしょう。十五　あなたは坐つていても勝てるでしょう。武運を賭けて戦うべきではありません。荒々しいコーカサスの男は平和を望まず、名誉ある平和さえも憎んでいます、もしかかれがいつものごとくあなたを急ぎ立て、悩ますようなら、かれを落ち着かせるための策を見つけないといけません。天はやがて自らの友であるあなたに安息を、敵であるキリスト教徒に苦しみを与え給うでしょうから。」十六　このような言葉^{ことば}を聞いて王は大いに勇氣づけられ、いまや敵の戦力を怖れなくなつた。破城槌の攻撃を受けた城壁もすでに一部が修復されたが、それに

も拘らず、破損し崩れた箇所^{ところ}の回復は王の心配の種であつた。市民である者も、そうでない卑しい者も、皆が精力的に働き、復旧の作業は熱を帯びてくる。

十七　だが、敬虔なるプリオーネはその間、嚴重に守られた町を攻めようとしないうち、攻撃に先立つて大型の破壁車と他の破壊装置の修繕が必要だと考えるからである。そのため樵たちを森に送り、戦闘車両の再建に資する木材を確保しようとする。樵たちは夜明けに森へ向かうが、森を見たときたんに得体のしれない恐怖に襲われて立ち止まる。

十八　無邪気な子供は不気味な亡霊が潜んでいると思われる場所を見ようとせず、また月明かりのない夜に恐ろしい魔物のことを考えて怖がるが、その子供のように、樵たちは何が自分たちを恐怖に陥れているか——キマイラやスピックスを凌ぐほど恐ろしい魔物を怖気づいたかれらは思い浮かべたのかもしれないが——分からずして怯えていた。

十九　陣営に戻つた樵たちは疲れ果て、当惑した様子で事の次第を報告するものの、話^{ことば}に脈絡がなく、矛盾があるので聞いている者たちの嘲笑^{あざわらひ}を買ひ、奇怪な出来事も信用されない。司令官は業を煮やして勇氣と体力を兼ね備えた兵士たちを選び出し、樵たちと共に森に向かい、樵たちに檄^{ごう}を飛ばして仕事に駆り立てよう命じる。二十　かの不気味な森の一角で、邪悪な悪魔たちが陣取つた場所に近づいた一行は、木々の黒い影が伸びているのを目にするや、心が揺り動かされ、凍てつくのを感じた。しかし怯懦^{けつだ}の念を大胆な面の下に包み隠して前進し、さらに先へと進んだ時、いまや魔法がかけられた地点のすぐ近くに達していた。二十一　その時突然、揺れる大地の土響きのごとき音が森

から発せられ、その音には南風が運んでくる騒然とした音や岩間に響く呻きのごとき波音も混じっている。獅子の唸り、蛇のシューシューという音、狼の遠吠え、熊の怒り声、そうした音が喇叭の音や雷鳴とともに聞こえ、斯くのごとき多様な音が集まって一つになっている。二十二 皆の顔から血の気が引き、怖れの兆候があらゆる態度に現れた。規律を忘れ、取り乱した兵士らは、先へ進もうとはせず、留まろうともしない。不可思議な力を受けて、抵抗する術も力も失ってしまっている。ついには逃げ出し、かれらのうちの一人は敬虔なるゴツフレードのもとで、「自分たちの失態を」詫びつつ、次の様に語る。二十三 「閣下、森の伐採を自らが担うと誇らしげに言う者はわれわれの中にもういません。森は「悪魔たちに」支配され、樹木には地獄の王が巣くつっていると私は思います（また、そう信じます）。あの森を直視しようとする強者の心臓は、強固なダイヤモンドで三重に、否それ以上で巻かれています。轟きとともに森から発せられる荒々しく鋭い音は、聴力が麻痺した命知らずの者しか聞こうとしないものです。」

註

- (一) 原作のトルクワット・タツソ著『解放されたエルサレム』は一五八一年初刊、全二十歌。今回は第十二歌全体と第十三歌の冒頭部を訳出する（紀要四十七号で紹介した拙訳の続き）。訳文中の「」は筆者による補足説明。（）は原文に付いているもの。
- (二) こうした戦場の様子はタツソが参照した史書の記述に基づいている。
- (三) 第十二歌六三―六十七参照。
- (四) ウェルギリウス『アエネ이스』第十一歌五十四節以下に登場するメタープス（カミラの父）をモデルにしている。アルセーテに育てられたクロリンダは、メター

- (五) さプスの娘カミラと同様に獣の乳を飲んで育ち（三十一節）、敵の剣を胸に受けて死ぬ（六十四節）。また三十四―五節における話も、幼いカミラを抱いて、増水した川のところへ来たメタープスの描写を下敷きとしている。
- (六) 十二世紀頃に西洋で広まったアレスタージョン（アジアもしくはアフリカのキリスト教国の王と考えられた謎の人物）の伝説に関係するとされる。龍の餌食になりかけていた王女を救出したとされる聖ジョルジヨ。
- (七) エルサレムの東の城門であり、実際に黄金で飾られていた。
- (八) 第十二歌四十九節参照。
- (九) 第十二歌の五十二―六十節は十七世紀の著名な作曲家モンテヴェルディによって曲が付けられ、「タンクレーディとクロリンダの戦い」と題されている。
- (十) タンクレーディの異常な言動はこの第十二歌の八十三節にも見られる。
- (十一) ビエートロはクロリンダが死の直前に洗礼を受けたことを知らない。
- (十二) 亡くなった想いの女性が天上的な姿で現れ、語るといふ設定は、ペトラルカ『抒情詩集』におけるラウラ、ダンテ『神曲』におけるベアトリーチェなどに先例が見られる。
- (十三) 古代ギリシャ神話で語られる石彫の名人。
- (十四) 第十二歌四十五―六節参照。
- (十五) サロンの森のこと。第二歌五十六節参照。
- (十六) 長寿や富や愛などを指す。
- (十七) 天罰により地下へ落とされた悪魔や墮天使たち。
- (十八) 魔女たちが仕える地霊界の魔神デモゴルゴン。神やキリストを指すという説もある。
- (十九) キリスト教軍に反抗することを禁じた神の命令。第九歌五十九節以下参照。
- (二十) いずれも北アフリカの原住民。



図1 キリスト教軍の破壁車に近づくクロリンダとアルガンテ
(第12歌43節にかかわる図、1760年版挿絵)



図2 冥界の勢力に呼びかける魔術師イズメーノ
(第13歌6 - 10節にかかわる図、1760年版挿絵)